読売歌壇

小池　光　選

「考える人」も大きく背伸びして駆け出しゆかむほどの秋晴　稲城市　山口　佳紀

【評】あまりに有名なロダンの「考える人」。苦渋に充ちたそのポーズだが、今日のようなみごとな秋晴れのもと、ふと立ち上がって駆け出すように思われる。想像力ゆたか。

柄の方を向けて鋏を渡せよと娘は子に言ふ我も言ひしか　藤枝市　北泊あけみ

【評】ハサミを人に渡すとき刃の方を向けて渡してはいけないと、娘が子に言っている。わたしもむかし同じことを言ったと思う。あれから何十年が過ぎたのだ。

金木犀の香りを線香代わりにし西田敏行の死を悼むなり　町田市　永井　悦子

【評】人が死ぬのはみな悲しいが、わけても活躍した芸能人の死は。キンモクセイの香りに充ちたしずかな秋の一日、哀悼。

午後おそく動物園に訪ひゆきて一対一のふくろふとわれ　仙台市　三角　清造

処方されし薬に酒は控えよと注意書きあり日暮れを帰る　海老名市　間藤　義教

投稿の歌読み返し「弱いね」とわれに向かいてわが独り言　秦野市　星　光輝

台所の窓に止まりし小さき虫をじっと見ており老人ひとり　狭山市　奥薗　道昭

朝七時はがきを出せば夕方に市内に着きし昭和中頃　福山市　宇田　雍子

若き父母と兄と我との四人家族あのいとしさよ今は我のみ　交野市　遠藤　昭

おかっぱの少女の髪を撫でながら我が来し方を思ひ居るなり　調布市　川久保洋子

栗木　京子　選

二尾のホゴはラップ外せば蘇り流しの桶で二日泳ぎぬ　大分市　薬師寺悦子

【評】ホゴはカサゴとも言う。買ってきたとき、まだ生きていたのだ。桶に泳がせる二日の間に情が移ったのかもしれない。「蘇り」「泳ぎぬ」という動詞に躍動感がある。

赤い羽根に百円少ないかと悔やみ再び出会って百円入れる　東京都　河野　樹美

【評】街で募金の呼び掛けと出会い百円を寄付した作者。少なかったかと悔やむ様子に誠実さがうかがえる。再び見掛けて、また寄付することができた。百円が輝いて見える。

気短も気長もありて家中の時計の質を覚えて暮らす　安中市　田口　明子

【評】時計を調整しても、いつの間にか遅れたり早まったりすることがある。擬人化して性質として表したところが新鮮に思われる。

千六本刻むリズムのととのはず老々介護の朝は明けたり　八王子市　小柳　清治

秋華賞の予想当てたと言うて来る母の風邪引きだいぶよくなる　枚方市　小川　洋子

マクベスの「明けない夜はない」領けどコロナの明日はなかなか見えぬ　調布市　坂本賀須恵

足元に落ち葉と思えば紋黄蝶わたしも葉になり旅立ちを待つ　相模原市　榎本　ハナ

ガーネット色をやどして暮れ方の橋は恐竜ねそべるごとし　埼玉県　鈴木えみ子

母さんが長袖着ると秋が来たと感じるのよと娘が言う　所沢市　青木　照子

「こんにちは」老人ばかり住む町で園児の声は小鳥みたいだ　八王子市　松田　敦子

俳　万智　選

私から抜けて駆け出す少女にはヒールの靴では追いつけなくて　広島市　宇井モナミ

【評】自分の中にいる自由奔放な少女。でも現実は、大人の女性として振る舞うことを求められている。速く走れない「ヒールの靴」が象徴的だ。

地上では暮らせなかったあの子らが手を振るような星浴びる夜　川越市　かしくらゆう

【評】昨今、世界で起きている戦争の犠牲になった子どもたちを思う。亡くなったら星になるという単純な構成ではなく、暮らしや振る手を交えたところに切実さがこもる。

インスタにあの子とこの子今日同じ写真載せてる神経衰弱　東京都　小林　愛実

【評】人物は写っていなくても一緒にいたことが推測できるのだ。同じ写真を探す行為と、心の疲労を重ねた「神経衰弱」が効いている。

三歳の偶然書きし「月」の字は人類をもう住まわせている　東村山市　月出里ひな

畑からはい出たカボチャ園児らに囲まれている馬車になるまで　船橋市　花沢富美雄

たわいないおしゃべりからの勧誘であったみたいだもうすぐ選挙　堺市　一條　智美

誤魔化してまた生きてゆく幾つものつめたい嘘に雪をかぶせて　東京都　音羽　凜

九月まで働きしビルより次のビル清掃へ振り向かずゆく　柏市　塩田　淳文

君という軸が有るからろうそくの炎のように笑えてる今日　高島市　宮園佳代美

存分に秋の日含む座布団に帰省せし子はうたた寝をする　青森市　安田　渓子

黒瀬　珂瀾　選

泣いてなどいないといくら言い張れど無人駅舎の赤錆び哀し　東京都　長野　靖

【評】泣いているのは時代に取り残された駅舎であり、作者自身の孤独な心なのだろう。それでも赤錆びの駅舎は、客を待つのだ。

空襲に幹を焼かれし善福寺のいちょう今年も黄葉さかり　川越市　石田浩二郎

【評】親鸞聖人お手植えの伝説も残る、元麻布の善福寺の大いちょう。戦禍に焼けても今なお威容を誇る、樹齢七五〇年超の巨木だ。どうか永く、その歴史を伝えてほしい。

永遠に死なないやうな気がしてた西田敏行さん惜しまれて　仙台市　田中　勢津

【評】僕もまったく同じ思いです。常にいるのが当たり前、そんな風に万人に親しまれる人が、各時代にわずかにいる。そういう人のことを、真の芸能者というのだろう。

放射線治療の終了伝えたき夫亡き家の扉を開く　宇都宮市　佐藤　順子

弓のごと長きポールをしならせて棒高跳はわが身を放つ　宮崎市　長友　聖次

わが叔父の棺閉ぢたる釘たちの焼かれて骨の白きに混じる　東京都　福島　隆史

孤の時をなべて喜ぶ我に似て黄の曼珠沙華一本咲けり　北九州市　稲葉　亜季

就寝後の二時間おきの用足しは長寿がゆえとわが身はげます　海老名市　玉川　伴雄

台本を読むまでもない吾のセリフたった一言「豊年だなあ」　守谷市　久保田洋二

オクターブ以上に指を広げつつゆったりと弾く秋の「月光」　札幌市　住吉和歌子

◇投稿規定◇　はがき１枚に未発表の１作品。住所、氏名（ふりがな）、電話番号を明記。◇他の媒体、選者への二重投稿は厳禁です。選者が添削することもあります。〒103・8601、にほんばし蔵前郵便局留、読売歌（俳）壇、○○先生（希望選者名）係または読売新聞オンラインから　◇毎週月曜日に掲載　右の影絵はなんてん